

自然遊学館 だより

2013 SPRING

No.67



若かりし頃のクロホシマンジュウダイ

当館の大阪湾の魚水槽で、来館者に体をクネクネさせながら近づき愛嬌をふりまいていたクロホシマンジュウダイが、2013年3月2日に亡くなりました。写真は2004年7月に撮影したものです。自然遊学館は今年の10月に20周年を迎えますが、そのほぼ半分の年月に渡って、来館者を楽しませてくれたこととなります。長い間、ありがとうございました。

2013.4.30 発行 貝塚市立自然遊学館

目次

*ネイチャーレポート

- 近木川河口で見つかったキヌカツギハマシノミ
(オカミミガイ科) ……和田太一・山田浩二… 1
- ふたのあるカタツムリ ……岩崎拓… 3
- #### *行事レポート
- 春の七草摘みハイキング ……白木江都子… 5
- 打ち上げ貝拾い ……山田浩二… 7
- 千石荘&近木川河口バードウォッチング
……………和田太一… 9
- 二色の浜の漂着物を調べよう ……山田浩二… 11
- 自然を食すⅢ ……川村甚吉… 11

*泉州生きもの情報

- オオヒライソガニ ……山田浩二… 15
- アリツカコオロギ ……岩崎拓… 16
- #### *館長コーナー
- 自然遊学館とは? ……高橋寛幸… 18
- #### *調査速報
- 和泉葛城山昆虫調査 2012 ……岩崎拓… 22
- #### *寄贈標本
- …………… 24
- #### *スタッフ日誌
- …………… 25
- #### *お知らせ
- …………… 26
- #### *お詫び(第66号の訂正)
- …………… 27

ネイチャーレポート

近木川河口で見つかったキヌカツギハマシイノミ (オカミミガイ科)

2013年2月16日に近木川汽水域の造成ワンドの生物調査を行っていた際に、隣接する左岸のヨシ原の貝類についても併せて調査を行いました。ヨシ原に分け入り、堆積したヨシの葉や漂着物の下を調べていたところ、オカミミガイ科のキヌカツギハマシイノミ *Melampus (Melampus) singaporensis* が1個体見つかりました。本種の大阪湾での記録は過去の文献などにも無いことから、今回の発見が大阪湾では初めての貴重な記録になるため報告します。

キヌカツギハマシイノミは殻長1cmぐらいの巻貝で、殻は茶褐色で螺塔の低い卵型をしています。個体によって殻の表面に数本の色帯を持つものと、そうでないものがあります。よく似たハマシイノミガイ *M. (M.) nuxeastaneus* は殻がより細長い紡錘形で螺塔もやや高く、生息環境は潮通しの良い外海に近い転石海岸や古い護岸の隙間などであり、汽水域のヨシ原のような塩生湿地で見られる貝類ではありません。

本種の属するオカミミガイ科は海辺に棲む原始的なカタツムリの仲間で、本州～九州では河口部のヨシ原などの塩性湿地や磯浜海岸、南西諸島ではマングローブ林などにいろいろな種類が生息しています。大阪湾では2003年に大阪市住之江区の大阪南港野鳥園の海水池でナギサノシタタリ *Microtralia acteocinoides* とウスコミ



キヌカツギハマシイノミ (近木川河口産)

ミガイ *Laemodonta exaratooides* が発見され、大阪湾初記録のオカミミガイ科2種として報告されました(和田、2004)。その後淡路島の洲本市の成ヶ島でナギサノシタタリ、ウスコミミガイ、マクスジコミミガイ *L. monilifera*、ハマシイノミガイの生息が発見されています(成ヶ島探見の会、2007; 川渕、2011)。また児島(2006)には波有手(阪南市)で得られたハマシイノミガイの新鮮な死殻の打ち上げ個体が掲載されています。

オカミミガイ科の貝類は高潮帯付近のごく狭い範囲にしか生息していないものが多いことから、護岸工事などによって真っ先に生息環境が失われてしまう危険性が高く、多くの種が絶滅危惧種に選定されています。キヌカツギハマシイノミの分布は三浦半島～九州、朝鮮半島、中国大陸、シンガポールで、日本ベントス学会編(2012)では個体数・個体群の減少、生息条件の悪化の理由から「絶滅危惧Ⅱ類」とされています。

筆者の観察では九州西岸の有明・八代海沿岸や、瀬戸内海の周防灘(山口県や大分

県など)にはまだ多産する産地が残されていますが、本種が生息する塩性湿地には他のオカミミガイ科やキバウミニナ科、カワザンショウガイ科、ドロアワモチ科などの多様な貝類が同所的に見つかることから、生物多様性の高い良好な塩性湿地の指標にもなる貝だと考えられます。

今回見つかったのは殻長 2.3 mm ほどの幼貝でした。おそらく浮遊幼生が流れ着いてまだそれほど間もない個体ではないかと考えられます。ではいったいどこから幼生が流れ着いたのでしょうか？

大阪湾周辺の産地としては増田・内山(2004)に兵庫県赤穂市産の標本写真が掲載されていますが、兵庫県版レッドデータブック 2003 では「今見られない」とされていて、最近の記録はないものと考えられます。紀伊水道(和歌山・徳島)でも過去の文献などから生息記録はないと考えられ、瀬戸内海中部(岡山・広島・香川・愛媛)でも近年記録がないことから、最も近い産地としては瀬戸内海西部の周防灘か、もしくは紀伊半島を回って伊勢湾流入河川の河口となり、これは距離的にもかなり離れていると言えるでしょう。今回の発見は瀬戸内海東部における記録として大変貴重だと考えられますが、もしかすると大阪湾や周辺のどこかに未知なる産地があるのかもしれませんが。近木川河口に以前からひっそりと生息していた可能性もありますが、今回の調査ではこの1個体が得られたただけでした。

近木川河口のヨシ原ではこれまでの生物調査で塩性湿地を特徴づけるカワザンショウガイ科の貝類が5種類確認されてお

り、大阪湾内ではたいへん貴重な場所であることが明らかとなっています(和田、2011)。今回の調査でもキヌカツギハマシイノミと同所的にクリイロカワザンショウ、クリイロカワザンショウ属の一種、ヨシダカワザンショウ、ヒラドカワザンショウが採集されました。しかしこうした塩性湿地の希少な貝類が生息可能だと考えられる範囲は、河口部のヨシ原の護岸際でも限定された場所であり、河川工事などによる生息地の消失や、台風や大雨などの増水による地形の変化によっても生息が困難になってしまうことも考えられます。今後もヨシ原の貝類の生息状況に注意していき、その保全を考える必要があるでしょう。

謝辞

採集個体について、他産地の標本と比較検討して頂きました児嶋 格さんにお礼申し上げます。

参考文献

- 兵庫県版レッドデータブック 2003 .
(<http://www.kankyo.pref.hyogo.lg.jp/JPN/apr/hyogoshizen/reddata2003/index.htm>)
- 児嶋 格 (2006)「大阪湾 男里川近木川河口周辺に生きる貝」. 66pp. きしわだ自然友の会.
- 川淵千尋 (2011) 由良湾・成ヶ島周辺の貝類「豊かな兵庫の自然力」(兵庫県生物学会編): 142-147. 神戸新聞総合出版センター.
- 増田 修・内山りゅう (2004)「日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類」. 240pp. ピーシーズ.
- 成ヶ島探見の会 (2007)「由良湾・成ヶ島の貝類 (2006)」. 141pp. 成ヶ島探見の会.

日本ベントス学会（編）（2012）「干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック」. 285pp. 東海大学出版会.

和田太一（2004）南港野鳥園で見つかった大阪湾初記録のオカミミガイ科2種. Nature Study, 50（4）：9-10.

和田太一（2011）近木川河口のカワザンショウガイ科. 自然遊学館だより. No. 59：1-2.

（和田太一（NPO 法人南港ウェットランドグループ）・山田浩二）

ふたのあるカタツムリ

皆さんがふつう、頭の中に思い描くカタツムリはどのようなものでしょうか。丸い殻から柔らかい体を出して、頭には大きな角があって、その先に目があるカタツムリ、それはクチベニマイマイなどがモデルでしょう。それらのカタツムリには、先に目がある大きな触角（大触角）2本の下に、よく見ると小さな触角（小触角）が2本あります（図1）。大触角が物を見たり明るさ感じたりするのに対して、小触角は味や臭いを感じると言われています。

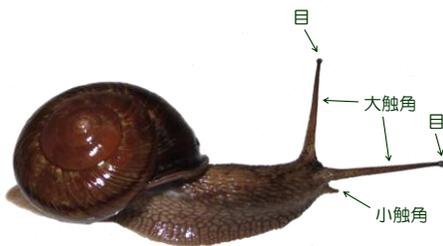


図1. ギュリキマイマイ

（貝塚市水間公園 2012年10月18日採集）

そのようなカタツムリは軟体動物の有肺類に属します。有肺類は文字通り肺を持つという意味で、陸産の有肺類は空気呼吸をします。空気中の酸素を肺で取り込めるということです。クチベニマイマイやナミマイマイは右巻きの丸い殻を持っていますが、キセルガイの仲間のように左巻きのとんがり型の殻を持つものや（図2）、あるいはナメクジの仲間のように殻を持たなくなったグループもあります。よく見るとナメクジにも大触角と小触角があります。これらはすべて有肺類です（図3）。

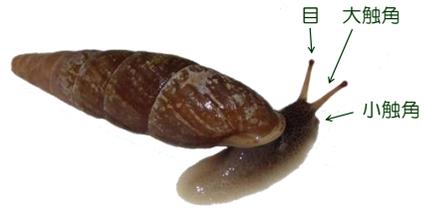


図2. オオギセル

（貝塚市蕎原東手川 2012年6月14日採集）



図3. ヤマナメクジ

（貝塚市千石荘 2012年7月17日採集）

有肺類は、難しい言葉ですが雌雄同体^{しゆうどうたい}といつて、1匹の中でオスとメスの役割ができ、2匹が交尾する時には、それぞれの交尾器を挿入しあって、精子を交換します。一部のグループには交尾器に恋矢^{れんし}と呼ばれる使い捨ての部分が付いています(図4)。



図4. ギュリキマイマイの交尾

(貝塚市水間公園 2012年10月18日採集)

有肺類のカタツムリは雌雄同体で、交尾はお互いが相手に交尾器を挿入して行われます。この写真は、2匹が挿入し合った後、右側の個体が交尾器を抜いた時に撮影したものです。この後、左側の個体も恋矢を抜いて、お互いに離れて行きました。

ここまでは有肺類(柄眼目)という蓋を作らないカタツムリの話でした。でも、カタツムリ(陸産貝類)には、別のタイプがいるのです。昨年末から約2ヶ月にわたって当館で開催していた「かたつむり展」をご覧になった方なら、ふたのあるカタツムリのことを知っていると思います。それらは、有肺類と比べると、あまり目にする機会がないかもしれません。軟体動物の前鰓類^{ぜんさうるい}の中の陸産のグループで、アツブタガイ、アズキガイ、ゴマガイ、ヤマキサゴ、ヤマクルマ、ヤマタニシなどを含まれます。乾燥したり敵に出会うと蓋を閉めて殻の中に閉じこもります(図5)。前鰓類は海の

巻貝を含み、蓋を持っているサザエを思い浮かべるとイメージがわくかもしれません。

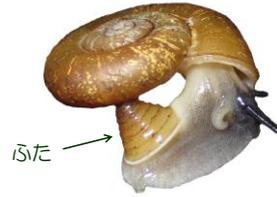


図5. ヤマクルマ

(貝塚市水間公園 2012年9月24日採集)

ヤマクルマ以外の前鰓類のカタツムリのふたは平らな円形をしています。ヤマクルマのふたはとんがり帽子のような立体的な形をしています。

前鰓類は体の前の方に鰓を持つという意味なのですが、陸に上がったグループは鰓呼吸ではなく、肺で空気呼吸されています(肺としっかり呼べる器官に進化していない種もいるのかもしれませんが)。有肺類との違いは、触角が1対、目が触角の基部にある(図6)、糞がひも状ではなく粒状^{しゆうたいたい}などがあり、さらに雌雄異体といつて、オスとメスがいるという特徴があります。

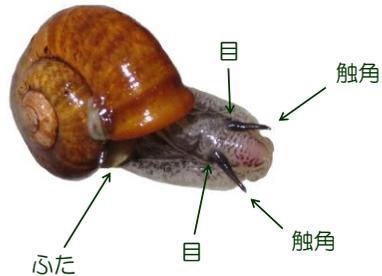


図6. アツブタガイ

(貝塚市水間公園 2012年9月24日採集)

有肺類と前鰓類のカタツムリは、いずれも貝塚市に生息していて、主に腐植を摂食

するなど共通点もありますが、このように違いも多々あります。それぞれが別々に、海産の祖先から陸に上がって、陸上生活に適応したものです。

以上、児嶋格先生の標本と写真をお借りして開催した「かたつむり展」の説明パネルから、有肺類と前鰓類の違いを簡単に紹介しました（表1と表2に特徴をまとめました）。

表1. 有肺類（柄眼目）のカタツムリの特徴

ふた	なし (粘液を固めたエビフラムという一時的なふたをつくる)
触角	2対（大触角と小触角）
目	大触角の先
呼吸	肺、空気呼吸
交尾	雌雄同体（＝1匹が♂と♀の役割をする） (お互いが交尾器を挿入しあう) (恋矢と呼ばれる器官をもつグループもある)
糞	ひも状
殻の巻き方	基本は右巻き (ナメクジ類は殻を持たない) キセルガイ科は左巻き

表2. 前鰓類のカタツムリの特徴

ふた	あり
触角	1対
目	触角の付け根
呼吸	肺か血管の分布した外套腔、空気呼吸 (水生の前鰓類は水中で鰓呼吸)
交尾	雌雄異体（＝♂と♀がいる） (♂が♀に交尾器を挿入する)
糞	粒状
殻の巻き方	基本は右巻き ヒダリマキゴマガイは左巻き

児嶋先生に話を伺い、参考図書にあげた教科書を読んで、本稿をまとめましたが、誤りがあれば、本稿執筆者の責任です。

参考図書

「日本動物大百科 第7巻 無脊椎動物」(平凡社、1997年発行)、pp. 81-84、陸産巻貝類。

黒住耐二氏担当箇所。

「動物大百科 14 水生動物」(平凡社、1987年翻訳発行)、pp. 114-137、軟体動物。June, E., Chatfield 氏担当箇所 (原本)。

(岩崎 拓)

行事レポート

春の七草摘みハイキング

日時：2013年1月6日(日)10:00~12:45

場所：蕎原ほの字の里周辺

参加者：41人

寒いお正月でしたが、七草摘みの日は、風もなく太陽も顔を見せ、穏やかな日和でした。

集合場所のほの字の里運動場に、お借りした丸テーブルを置き、これから採集する「セリ」「ナズナ」「ハハコグサ」「ハコベ」「ホトケノザ」の見本を並べ、配布したプリントの絵と見比べてもらいました。

難関はやはりコオニタビラコ、田んぼの縁に生えているので、日頃なかなかお目にかからない上に、特徴の少ない姿形、春の七草の中では「コオニタビラコ」ではなく「ホトケノザ」という名前が登場しています。現在ホトケノザという名前のシソ科の植物が別にありますから、なおややこしい！



ハハコグサ

俗にペンペングサと呼ばれている「ナズナ」は、花も姿も「タネツケバナ」と似ていますが、葉っぱの切れ込み方や種の形が違います。「子供のころ、ナズナとよく似ているのに、ハート形の実がついてない、と不思議に思ったのですが、あれはタネツケバナだったのです」と、何十年来の疑問が解けて喜んでくださったお母さんがおられました。「ハハコグサ」は、12月の下見のときに、小さな株を3つ見つけましたが、年毎に少なくなっているのに、今年は採集しないで花を咲かせて増やす方針を決め、参加者にもその旨お願いしました。ハハコグサの見本の横に「チチコグサモドキ」の株も並べましたがよく似ています。ハハコグサの芽生えは、全体に毛が多いためチチコグサモドキより白っぽく見え、葉の幅も狭いようです。この仲間はまた他に、チチコグサ・ウラジロチチコグサ・キヌゲチチコグサ・タチチチコグサ・ウスベニチチコグサなどの帰化植物があると紹介すると、ブーイングしきりでした。

高橋館長から、「七草粥に七草をたくさん入れると、苦くておいしくないから控え

めに入れること、個人の土地の野草を採集させていただくので、極力田畑の中へは入らないこと」などの注意があり、10:30 ほどの字の里を出発しました。



七草が見つかったかな

今年は参加人数が多いので、湯浅班と白木班に分かれました。白木班は、ほの字の里の坂道を下りた七草見本園のような小さな田んぼで、参加者一人ひとりが5種類を見分けることができるように特訓しましたが、採集はどれも葉数枚に止めてもらいました。畦に生えていたオオバコの葉は天ぷらに、堀の縁に群生していたノビルの球根は、生のまま酢味噌で食べることなどを紹介した後は、蕎原の田畑や山裾で、予習した七草を自分で見つけることができるかどうか、武者修行に出向きます。



七草がゆをいただきました

予習の甲斐あって、溝の中にセリと間違
い易いキツネノボタン（有毒）を発見、コ
オニタビラコが田んぼの縁にしか見当た
らないことなども確認しました。新たにハ
ハコグサの生えている場所を見つけてく
れた少年もいて、来年が楽しみです。

12 時前にほの字の里に戻った参加者は、
川村前館長がお土産用に準備して下さっ
ていたダイコン（スズシロ）とカブ（スズ
ナ）を含めて7種を手渡され、お餅の入っ
た七草粥をお腹一杯いただきました。

<出現植物>

コオニタビラコ・オニタビラコ・ハハコグサ・チ
チコグサモドキ・ウラジロチチコグサ・ナルトサ
ワギク・ヨモギ・ノアザミ・アメリカセンダング
サ・コセンダングサ・タンポポ・フキ（以上キク
科）ホタルブクロ（キキョウ科）スイカズラ（ス
イカズラ科）アカネ（アカネ科）オオバコ（オオ
バコ科）ホトケノザ・ヒメオドリコソウ・カキド
オシ（以上シソ科）テイカカズラ（キョウチクト
ウ科）セリ（セリ科）ビショコ・ヤブツバキ（以
上ツバキ科）ヘビイチゴ・ナワシロイチゴ・フユ
イチゴ（以上バラ科）ユキノシタ（ユキノシタ科）

ナズナ・タネツケバナ・イヌガラシ（以上アブラ
ナ科）ムラサキケマン（ケシ科）ビナンカズラ（マ
ツブサ科）キツネノボタン（キンポウゲ科）ハコ
ベ（ナデシコ科）ギシギシ・イタドリ（以上タデ
科）シャガ（アヤメ科）ヒガンバナ（ヒガンバナ
科）ノビル・ジャノヒゲ（以上ユリ科）ミツドウ
ラボシ（ウラボシ科）シシガシラ（シシガシラ科）
ワラビ・イノモトソウ・ノキシノブ（ワラビ科）
コシダ（ウラボシ科）ゼンマイ（ゼンマイ科）

（白木 江都子）

打ち上げ貝拾い

日時：2013年2月2日（土）13:00～16:00

場所：近木川河口右岸

自然遊学館特別展示会場2階

参加者：49人

午後1時、自然遊学館に参加者が集合し
た後、近木川河口右岸の前浜まで移動しま
した。講師の児嶋 格さんより、打ち上げ
貝をたくさん拾えるポイントなどのレク
チャーを受けた後、小一時間ほど自由に拾
集を行いました。たくさんのアサリやマガ
キなどのほか、参加者に人気の高いサクラ
ガイが例年と比べ、多く拾えました。

また、これまで近木川河口では記録され
ていない種として、フジナミガイ（シオサ
ザナミ科）、ヒメカノコアサリ（マルスダ
レガイ科）の2種の貝殻が見つかりました。
それぞれの拾集個体については、フジナミ
ガイは左殻のみの半片で、一部欠損した状
態だったのに対して、ヒメカノコアサリは
両殻のそろったものでした。



打ち上げ貝を拾い集める



ヒメカノコアサリ
近木川河口初記録

今回の観察会で確認された打ち上げのリストを右表に示します。打ち上げ貝は海産43種、淡水産3種、陸産8種の計54種でした。昨年(計41種)と比べると、多種が確認されましたが、特に陸産種が昨年の2種から大きく増加しました。

また、打ち上げの魚としては、泉州ではネプトと呼ばれ、郷土料理「ごより豆」の材料となるテンジクダイが干物状態で見つかりました。

拾集した貝は特展会場(元関空交流館)に持ち帰り、各自お気に入りの貝殻を紙皿に貼る作品作りを行いました。

観察会で確認した打ち上げのリスト 貝塚市立自然遊学館

グループ	和名	近木川河口 2013/2/2 49人		
腹足綱	ヨメガカサガイ科	マツバガイ	rr	
	ニシキウズ科	コシダカガンガラ	r	
		インダタミ	r	
		アシヤガイ	rr	
	サザエ科	サザエ	rr	
		スガイ	rr	
		アマオブネガイ科	イシマキガイ	r
	タマキビ科	タマキビ	r	
		マルウズラタマキビ	rr	
		カリバガサガイ科	シマメノウフネガイ	cc
	ソデボラ科	シドロ	rr	
		タマガイ科	ツメタガイ	c
		アツキガイ科	レイシ	rr
			イボニシ	r
			アカニシ	r(LD)
フトコロガイ科	ムギガイ	r		
ムシロガイ科	ムシロガイ	r		
	アラムシロ	c		
ブドウガイ科	ブドウガイ	rr		
二枚貝綱	フネガイ科	カリガネガイ	r	
	サルボウガイ	c		
	イガイ科	ムラサキガイ	r	
		ヒバリガイ	rr	
	ホトギスガイ	c		
	イタヤガイ科	イタヤガイ	rr	
	ナミマガシワ科	ナミマガシワ	c(LD)	
	イタボガキ科	マガキ	cc	
	トマヤガイ科	トマヤガイ	rr	
	ザルガイ科	トリガイ	rr	
	バカガイ科	バカガイ	rr	
	チドリマスオ科	クチバガイ	r	
	ニッコウガイ科	サクラガイ	r(LD)	
		ヒメシラトリガイ	r	
	シオサザナミ科	フジナミガイ	rr	
マテガイ科	マテガイ	rr		
シジミ科	ヤマトシジミ	rr		
マルスダレガイ科	ヒメカノコアサリ	rr		
	オニアサリ	rr		
	カガミガイ	r		
	アサリ	cc(LD)		
	ウチムラサキ	rr		
イワホリガイ科	ウスカラシオツガイ	rr(L)		
オオノガイ科	オオノガイ	rr		
淡水産	タニシ科	ヒメタニシ	rr	
	リンゴガイ科	スクミリンゴガイ	c	
サカマキガイ科	サカマキガイ	rr		
陸産	アズキガイ科	アズキガイ	r	
	キセルガイ科	ナミコギセル	rr	
	オカクチキレガイ科	トクサオカチョウジガイ	rr	
	オナジマイマイ科	ヒメタマゴマイマイ	r	
		ウスカワマイマイ	rr	
		オオケマイマイ	rr	
		クチベニマイマイ	rr	
	ギョーリキマイマイ	rr		
頭足綱	コウイカ科	コウイカ科の一種	r	
甲殻類	モクズガニ科	イノガニ	rr	
多毛類	カンザシコカイ科	カンザシコカイ類の棲管	rr	
魚類	テンジクダイ科	テンジクダイ	rr	
計		58		

凡例：数量：cc 多数、c 普通、r 少数、rr ごく少数
(L) 生体確認、(LD) 身入りの死殻



貝の紙皿作品（参加者制作）

（山田 浩二）

千石荘 & 近木川河口

バードウォッチング

日時：2013年2月23日（土）10:00～15:00

場所：千石荘、近木川河口右岸

参加者：22人

今年も里山や水辺で冬を越す野鳥たちの様子を観察するバードウォッチング行事が行われました。まず午前中は千石荘で里山に暮らす鳥たちを探しました。「こすもすの里」バス停に集合した後、隣接する池に移動して最初のあいさつをした後、池の縁で休むアオサギをみんなで観察しました。これからちょうど繁殖期に入るため、成鳥は婚姻色に変わっていて、嘴の付け根付近が鮮やかなピンク色に染まり、目先の裸出部も濃い紫色をしていました。

林の中の道を歩き出すと、アオジやシロハラが何羽も道端に出てきて餌を探していましたが、なかなか警戒心が強くじっく

り観察できませんでした。木の高いところからはシジュウカラやメジロ、シメなどの鳴き声が聞こえてきて、双眼鏡でその姿を探して歩きました。途中のサクラの木にはコゲラの古巣も見られました。

カンコ池ではキンクロハジロやカイツブリが何羽も浮かんでいて、水辺ではバンが泳ぐ時に首を前後に振る様子なども観察しました。池の対岸の木にはササゴイが一羽止まっているのが見られました。ササゴイは本州では普通は夏鳥とされるので、こうして冬場に見られるのは珍しいと思います。

林を抜けて開けた農耕地へ出ると、カララヒワの群れやケリ、ツグミなどが田畑に降りて餌を探していました。そして少し離れた林の上空にオオタカが飛んでいるのが見付き、林の中に勢いよく急降下して姿を消したと同時に、今度はノスリが飛び出してきて、こちらはゆっくりと上空を旋回する様子が観察できました。例年よりも小鳥類の姿がやや少なく感じましたが、午前中のまとめをしている時にベニマシコの鳴き声と飛ぶ姿が一瞬だけ見られました。



千石荘でのバードウォッチング

午後からは近木川河口で水辺の鳥の観察です。自然遊学館をスタートして、今年には右岸の汽水ワンドに行ってみました。ワンドの中にはカルガモの群れがいて、上尾筒の色や模様でオスメスの識別にも挑戦しました。

近木川を上流に歩き出すと、29号線の下をくぐった先でカワセミのオスが姿を現しました。護岸の上やヨシの茎に止まってじっと水面を見つめ、獲物を狙って水面に何度もダイブしました。そのうち、マハゼと思われる小魚（でもカワセミにとっては結構大きい）を見事に捕まえました。



ハゼをくわえるカワセミ

河原にはコガモやイソシギ、コサギ、ハクセキレイとセグロセキレイなどが次々と現れ、左岸に移動し河口に向かってと歩き出すと、ジョウビタキのきれいなオスも見られました。カワセミも再び現れ、その姿に皆さん感動されていました。河口部のヨシ原にはオオジュリンの群れがいて、「チュリーン」と鳴きながら、ヨシの茎に付いている虫やヨシの穂をついばんでいる様子も見られました。



ジョウビタキ (オス)

近木川の河口に出ると、河口部の砂嘴でセグロカモメとカワウが休んでおり、二色浜方面からたくさんのカモの群れが飛んできて河口沖に着水しました。望遠鏡でのぞいてみるとすべてヒドリガモで、カウントすると146羽もいました。

最後に今日観察できた主な鳥を図鑑でおさらいして、現地で解散しました。

<観察された野鳥>

・千石荘

キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、カワウ、ササゴイ、アオサギ、ダイサギ、バン、オオバン、ケリ、トビ、オオタカ、ノスリ、コゲラ、ハシボソガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス（さえずりのみ）、メジロ、ムクドリ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カラヒワ、ベニマシコ、シメ、ホオジロ、アオジ。

(合計 30 種)

・近木川河口

ヒドリガモ、カルガモ、コガモ、キジバト、カワウ、アオサギ、コサギ、ケリ、イソシギ、セグロカモメ、カワセミ、モズ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツグミ、イソヒヨドリ、ジョウビタキ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ホオジロ、オオジュリン、ドバト（帰化種）。

(合計 23 種)

鳥の名前の順番は日本鳥類目録改訂第7版の分類順に従っています。

(NPO 法人南港ウェットランドグループ
和田 太一)

二色の浜の漂着物を調べよう

日時：2013年3月16日(土) 10:00～12:00

場所：二色の浜

参加者：15人

二色の浜の砂浜には毎日、いろいろなものが漂着物として打ち上げられます。先月の観察会では貝殻に注目して、貝殻拾いを行いました。今回はすべての漂着物を対象にしました。どのような漂着物があるのかを整理するため、「海辺の漂着物ハンドブック」文一総合出版にならい、拾ったものを4つのグループに分けて集めてみました。海から来た自然物(魚や貝殻など)、海から来た人工物(漁具など)、野山から来た自然物(流木や木の実など)、街から来た人工物(プラスチック容器など)の各グループです。

参加者は自分の拾ったものを持参しては、「どのグループに入るのかなあ?」と、いつになく質問が多く飛び交う行事になりました。1時間ほど拾い集めた結果、一番多く集まったのは予想通り、街から来た人工物でした。ペットボトル、空き缶、ビニール袋、歯ブラシ、たばこのフィルターといったさまざまな日常品のほか、プラスチックの製品の材料となるレジンペレッ



漂着物をグループごとに区切る

トや危険な注射針も見つかりました。海から来た人工物では、釣りの浮きや餌を入れる容器、漁のロープなどが見つかりました。海から来た自然物では、貝殻、コウイカ類の甲のほか、たくさんの海藻が見つかりました。野山から来た自然物では、木の枝や竹の棒、まつぼっくり、植物の種、動物の骨が見つかりました。

普段、浜辺を歩いている際に何気なく目にする漂着物ですが、どこからやってきたのか、その由来に思いをめぐらすことで、野山と海、街と海とのつながりに改めて気づかされたのではと思います。

(山田 浩二)

自然を食すⅢ

日時：2013年3月24日(日) 12:00～15:00

場所：自然遊学館特別展示会場

(元関空交流館)

参加者：24人

目的：自然の恵みを感じて食す

(春の野山や海にある自然の食材)

の名と料理法を学び、自然の恵みに感謝して食べる)

講師：栗山 昭先生（国家資格調理免許習得）

メニュー：

イカめし、キノコ汁

酢ワカメ、カラスノエンドウの胡麻和え、天ぷら（アサツキ、レンゲ、カラスノエンドウ、フキの葉、セリ、ツクシ、イワシ）

ヨモギクッキー（実習）

柿の葉茶

食材と準備物：

イカ 7 匹、米 16 カップ、天ぷら油 3 リットル、小麦粉 2 キログラム、ホットケーキミックス 800 グラム、味噌 1 箱、だし、ポン酢、酢、砂糖、酒、塩

天ぷら材料、ヨモギ、柿の葉茶

カセットコンロ 5 台、カセットガス 6 本、フライパン 5 個、鍋 2、ボール 5、大茶瓶 1、手拭、ふきん、バケツ、ゴミ袋、紙皿 25、ペーパータオル 4 巻



おかず

活動の様子

今回は全員出席で、開始時刻 12 時に遅れたのは 1 家族だけでした。配膳を終え、「いただきます」の声を合わせたのは 12

時 5 分でした。特に何の説明もしなくて、初めから食べるという学習はめったにありません。



食事の様子

主食は炊き込みご飯のイカメシ、汁はシイタケのみそ汁、おかずは酢ワカメ、和え物、天ぷらです。調理施設のない当会場では事前に作れるものは作っておかなければなりません。活動開始時刻の 5 時間前から実際的な準備が始まります。米を 16 カップ、3 つの釜に分けて入れ洗わなければなりません。天ぷら材料を確認しなければなりません。基本的な準備が出来たころ、栗山先生は 8 時にかけてつけてくれました。栗山先生は手際よく炊き込みご飯の調合や、天ぷらが順調にできるようにしてくれています。過去の反省からおかずに名札を付けました。例えば、酢ワカメ、カラスノエンドウの胡麻和え、天ぷらにはその材料の名前をカードに書いたものを並べて、後で感想を述べ合う時、まごつかないようにしました。

食後簡単な後片付けをし、挨拶から始めることにしました。高橋館長は自然の恵みに感謝し、その営み知り、世代をつなげて

いくことが大切だと話されました。スタッフの紹介、栗山講師先生の紹介の後、改めて本日の日程の説明をしました。

次は栗山先生から、本日の料理の説明です。炊き込みご飯は米1カップに付、大匙1杯の醤油を入れるのがコツだと説明されました。みそ汁は味噌を入れて、沸騰させると風味がなくなると説明してくれました。テン普拉の野菜は160℃くらいでゆっくり揚げる事が大切だと教えてくれました。

川村は本日扱った植物全般について説明し、特にこの自然を食す行事は「繊維質」を多くとり、内臓の調子を整える事にこだわっていることも述べました。

去年は「ヨモギもち」を作ってきて、デザートにしましたが、今年はヨモギを使ってクッキーを実習しました。好評でした。



実習の様子



ヨモギホットケーキ

記述アンケートから

自然を食すⅢ (2013. 3. 24) 感想

今日はありがとうございました。普段口にすることのない自然の食料で珍しく味わいながら食べることが出来ました。すべての食材が風味がよくとてもおいしかったです。時間があれば自分で草を摘んで料理するまで楽しみながらやってみたいです。

(無記名1)

今日は楽しかったです。レンゲがおいしかったです。

(そが ゆうか)

ヨモギホットケーキがとてもおいしかったです。メカブ以外はとてもおいしかったです。今日は楽しかったのもまた、違う季節に来たいと思いました。(曾我 幸加)

ご馳走様でした。何もつけなくてもおいしかったです。

子どもたちも好き嫌いなく食べていました。最後のヨモギホットケーキはほんのり甘くてとてもおいしかったです。イカメシ、みそ汁も具材シャキシャキしていておいしくおなか一杯になりました。これで2回目ですがまた来たいと思いました。ありがとうございました。(曾我 直樹)

カラスノエンドウの天ぷらはとてもおいしかった。野草の天ぷらはとてもおいしいと思った。ヨモギのホッ

トケーキもおいしかった。ヨモギの食べ物はずきだからいえでつくってたべてみたい。(無記名 2)

今日はとてもおいしく、また、知らないことも知ることが出来るうれしかったです。まさかツクシが大きくなるとスギナになるとは知りませんでした。また、手軽なホットケーキミックスにヨモギを入れるとバターもシロップもなしでもおいしく食べることが出来、やってみたくて思いました。イカメシも天ぷらもワカメも、メカブもおいしかったです。野草の柔らかさにあまりにもびっくりでした。ありがとうございました。(無記名 3)

野草の天ぷらは大変おいしかったです。できれば摘むところから体験したいです。カラスノエンドウが食べられるとは知りませんでした。また、胡麻和えは美味でした。子どもにはヨモギの葉を見せてあげたらこんな葉っぱもオカシになることがわかえて一層よかったです。また、参加したいです。(無記名 4)

いろんなものがたべられてよかったです。(無記名 5)
いつもいつもありがとうございます。春の食材をおいしく頂きました。ヨモギのホットケーキはこどもも好きな味で良かったです。ツクシの天ぷらで春を感じました。脚の痛みをこらえての野草集め、ご準備ありがとうございました。おいしかったです。(谷口)

今日初めてきましたが、ヨモギがホットケーキになるなんてはじめて知りました。お家でもやってみたくてです。あの柿の葉っぱのお茶はつぶしてのんだのですか。乾燥してのんだのですか。とてもおいしかったです。ツクシはおばあちゃんのお家のうらに山ほどあるので使って天ぷらにして食べてみたいです。わたしはワカメをみそ汁に入れて食べてみました。イワシが一番おいしかったです。魚は嫌いだけれどこれはすごくおいしかったです。今回は本当にありがとうございました。(西田 幸乃)

はるのたべものおいしかった。ヨモギのホットケーキもおいしかった。おかわりができて良かった。らい年もここにきたいです。みそしるもイカのごはんもおいしかったです。(西田 こうた)

春の食材をいただくということで今回初めて参加させて頂きました。どの食材も大変おいしくまた、とても勉強になりました。ワラビやぜんまい等でなくどこにでも生えている野草をいただくのはあまり機会のないことなので興味がわきました。また、機会があれば参加させて頂きたいです。(無記名 6)

今回初めて参加させて頂きとても勉強になりました。食物が体を作るというのをいつも心がけて、季節の野菜等子供たちに食べさせたいと思います。また、次回も参加したいです。ありがとうございました。(無記名 7)

子どもや他の人たちと楽しくなかなか食べる機会のない身近な野草を食べることが出来非常に有意義な時間でした。カラスノエンドウの胡麻和えがある意味野草らしい癖があり、おいしかったです。ヨモギのホットケーキもおいしく食べられまた、一度作ってみたいなど思いました。次回には妻も一緒に参加できれば楽しいだろうなと思います。数多くの野草を今回の行事のために用意して頂きその苦労は大変だったと思います。ありがとうございました。(無記名 8)

自然の野草の「素の味」を頂きありがとうございました。自然の準備の大変さに感謝は無論でございますが、現在社会の野菜の原点を感じさせて頂きました。「自然の味」と「料理のお上手さ」で本当に良い味わいでございました。ツクシのてんぷらがまさに春を食す感じで、メカブもその他どの野草もおいしくいただきました。やはり自然の食べ物が体に良いとの思いを強く感じ今後も野草を食す機会があればと思います。本当に誠にありがとうございました。皆様のますますのご活躍を祈念申し上げます。

 泉州生きもの情報

オオヒライソガニ

2012年10月22日、貝塚市の人工島（二色南町）にある大阪府南部流域下水道事務所が管轄する中部水みらいセンターの水路で生きもの調査を行いました。この水路は、流域下水道からの水が、施設内の様々な過程で浄化された後、きれいな処理水となって海へと流れるところです。海につながっているため、この年の夏から秋にかけては、アユがたびたび確認され、センターの職員の間でホットな話題になったことがきっかけになり、この水路にはどんな生きものが生息しているのか調べてほしいとの依頼を受けてのものでした。

胴長をはき、タモ網を持って水深 30 cm ほどの水路に入り、底にたくさん入れられている礫をどかすと、潜んでいたモクズガニが次々と姿を現します。しばらく採集を続けていると、モクズガニとは異なるカニのはさみをひとつ見つけました。はたして一体何ガニのものだろうかと気になっていたところ、両はさみの外れた見慣れないカニが採集されました。なんと、オオヒライソガニ *Varuna litterata*（モクズガニ科）です。貝塚市では初記録、大阪府でもほとんど記録されていないと思われる種です。

甲羅は平たく、額が板状に前方に張り出しています。歩脚も平たく軟毛が豊かで、遊泳に適していると考えられます。相模湾以南の汽水、淡水域に広く分布しますが、流木などについて沖合を漂流しているこ

ます。栗山先生大変お疲れ様でございました。ありがとうございました。（森本 昭芳）

野草も天ぷらにすれば不思議なほどにがみもなくなり、おいしくいただきました。最後に作ったヨモギのホットケーキ、ホットケーキミックス 10 に対してヨモギ 4 とのこと、味もまるやかで特にやきめの茶色と色鮮やかなケーキの緑色がすごく綺麗でした。少し薄く焼き、餡を間に入れてもおいしいと思いました。ご馳走様でした。（森本 信江）

今回も参加させて頂きありがとうございました。子どもがはまっていて、今回も「参加する」と大喜びでした。食すことで体で自然の恵みを体感させていただけうれしく思います。雑草ではなく親しみのある植物として目が向かうかなと思いました。きれいな野草はなかなか手に入れられなくとも旬の食材を食卓にあげて楽しみたいと思いました。柿の葉のお茶も作ってみたいです。自然を食すに参加させて頂くと改めて自分も自然の一部でありたいと思いました。いつもありがとうございました。（品田 祐加子）

どくのことやたべたらだめなもの、いいものなどを教えてくれてよくわかりました。10 回いじょうきても知らないものがいっぱいあってべんきょうになりました。すごくおいしいものやホットケーキなどをやってくれたので楽しかったです。（品田 こうき）

（川村 甚吉）



オオヒライソガニ (♂、甲幅 45.8 mm)
貝塚市産 2012年10月22日採集
(A) 背面、(B) 腹面

ともあります。本種のメガロパ幼生は比較的大型で、川をさかのぼることが知られています。なお、よく似た種にタイワンオオヒライソガニ *V. yui* がありますが、Hwang & Takeda (1986) の文献に基づき、形態を細部に確認したところ、オオヒライソガニに同定されました。採集されたのは甲幅 45.8 mm の立派なサイズのオスの 1 個体でした。先に見つけたはさみも同種のもので、サイズの的にもこの個体から離脱したものと考えられました。逃げ回っているうちに、はさみが取れてしまったのでしょう。

この水路は冬季も水温があまり下がらないため、放流したグッピーやナイルテラピアが 1 年中生息できる特異な環境下にあります。自然の川ではない場所にも海からさまざまな生きものがやってきて、住み着いていることを実感しました。

調査者

今井健太・岩崎拓・山田浩二 (以上、自然遊学館)
片木智生 (中部水みらいセンター)

引用文献

Hwang, J. -J. & M. Takeda (1986) A new freshwater crab of the family Graspidae from Taiwan. *Proceedings of the Japanese Society of Systematic Zoology* (33): 11-18.

(山田 浩二)

アリツカコオロギ

2013 年 2 月 13 日、近木川河口付近右岸につくられた汽水ワンドの北側にある斜面を調査中のことです。植栽されたソメイヨシノの近くの地面にあった石をめくると、ワラジムシ多数とチャコウラナメクジ 1 個体が出て、アリも多数いました。そのアリの巣の入口あたりを明褐色の虫がうろちよろしていました。1 個体は体長 2 mm 弱で (図 1)、もう 1 個体はそれより一回り小さく、すぐにアリの巣の中に入っていました。

残った大きい方の個体を慎重に撮影・採集し、自然遊学館に持ち帰り、「バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑」¹⁾ で調べ、体サイズ・体色・生息場所・アリの種などの条件から、サトアリツカコオロギ *Myrmecophilus tetramorii* と同定しました。産卵管があるメス成虫でした。アリはトビイロシワアリ *Tetramorium tsushimae* でした。



図 1. サトアリツカコオロギのメス成虫

(左側が頭：周囲にいるのはトビイロシワアリ)

先の大図鑑には、アリツカコオロギ科として、1属10種があげられています。アリの巣内か近くで生活する「好蟻性」の種で、ある程度、アリツカコオロギとアリの種の組み合わせは決まっているようです(ただし、小松貴・丸山宗利さんの論文²⁾には、アリツカコオロギの中には、いろいろなアリの巣にすむもの(ジェネラリスト)もいることが紹介されています)。

自分が以前、千石荘で倒木内のトビイロケアリの巣で見たものは、アリとの組み合わせで判断すると、テラニシアリツカコオロギだということになります。その時は採りそこなったので、今回が当館のアリツカコオロギ科の初標本ということになりました。当館のバッタ目標本の中で最小のサイズです。

大図鑑からアリツカコオロギの形態と生態の記述を引用すると、「無翅(=成虫になっても翅が生えない)で発音器を欠く。複眼は非常に小さく」、「アリの栄養交換に分け入ってそれを舐め取るほか、種によってはアリの食べ残した昆虫の死骸などを

食べる。また、飼育下ではアリの体表を盛んに舐める様子が観察される」そうです。

どうしてアリの体表を舐めるのか、その答えは秋野順治さんたちの論文³⁾に書かれています。同じ巣にすむアリの体表面の化学物質の組成は似ていて、その「臭い」によってアリたちは同じ巣の仲間だと認識し、お互いにケンカしないようになっています。その臭いをアリツカコオロギが盗み取っているわけです(化学擬態と書かれています)。いったん仲間だと騙すことに成功すると、アリの巣は安全な住み家になり、餌も一方的にもらえることになります。それでもし違う巣にアリツカコオロギを移すと、アリからよそ者だと思われて最初は攻撃を受け、すばやく逃げなければならないことになるそうです。

以上、アリツカコオロギの採集例の報告とともに、地面の下で小さな虫たちがいろいろ面白いことをやっているお話を紹介しました。

(注) アリツカコオロギという和名が使われることもありますが、本稿では「バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑」に従って、アリツカコオロギの表記を使用しました。

引用文献

- 1) 市川顕彦・伊藤ふくお・加納康嗣・河合正人・富永修・村井貴史編著(2006)「バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑」、687pp.、北海道大学出版会。
- 2) 小松貴・丸山宗利(2010)アリツカコオロギ属研究の現状。生物科学 61(4):200-207。
- 3) 秋野順治・望月理絵・森本雅之・山岡亮平(1996)

好蟻性昆虫アリヅカコオロギによる多種アリ類への化学擬態. 日本応用動物昆虫学会誌 40 (1) : 39-46.

(岩崎 拓)

館長コーナー

自然遊学館とは？

自然遊学館にお世話になり2年が過ぎました。戸惑いの多い2年間でした。それに昨年度は貝塚市役所の機構改革元年でした。いろいろな出来事がありました。館長コーナーの初めに、前号(66号)でお知らせした雨漏り改修工事が、平成24年度末をもって終了しことを報告させていただきます。今回の館長コーナーは雨漏り改修工事のことからお伝えしたいと思います。その後、タイトルの遊学館のことを語ることにしました。

遊学館雨漏り工事完了

右上の写真は改修工事終了後の遊学館。全体が明るくなり、ヒビの入ったようになっていたガラスも取り替えられきれいになりました。一目見て綺麗になったのが分かります。

工事は雨漏り箇所確認の後、遊学館全体を囲むように、足場が組まれました。その後、全体を覆うようにシートが張られました。



改修後の自然遊学館全景（南側より撮影）



シートで覆われた館（南東側より撮影）

次に、高圧洗浄による外壁の汚れ落としが行われました。20年近く積み積もった汚れがきれいに落とされました。



高圧洗浄車と遊学館（東側より撮影）

そして、ガラス磨きや、割れたガラスの取り換えが行われ、防水塗料の吹き付けが作業員の手で丁寧に行われました。屋根裏の雨水受け設置、汚れた天井板の張替も行われました。



手作業による作業風景

この改修工事前には、遊学館正面玄関の横や南東側の側面等に入口案内板が設置されました。これにより、入口が分かりやすくなったとの声も届いています。皆様、遊学館に是非お越しください。

これからが本題です。

きれいになった自然遊学館は今後どのような役割を担うのか？考えてみました。平成24年4月1日から機構改革により、遊学館は都市政策部・都市計画課から教育部・社会教育課に移り、社会教育に係る位置につきました。

社会教育に係るためには、まず、多くの皆様が興味・関心を持つ展示や行事、必要とする出前授業や講座を行い、多くの市民の方に参加していただき、人と人との交わりができる場を作ることが第一段階です。

そして、次に、その中で仲間づくりや人間形成ができる場を提供することができなくてはなりません。言い換えると、人と人とのかかわりから社会性を学ぶ場を提供しなければいけないということになります。

では、その為に遊学館が考える具体的な内容を三段階に分け以下に紹介します。

まず、興味ある行事を企画・立案し開催します。(これが難しいのですが)

行事に参加された方々は生きものの生態に疑問を持ち、遊学館職員や講師に質問します。更には生きもののかかわり方について指導を受けます。そうすると新しい知識が増え、生きものがすきになります。このように、『生きものだいすき人』を増やすことが一番良いと考え、そこから始めています。(これが第一段階)

次に、行事に興味を持った方々は、行事参加に楽しみを感じ、リピーターとなり幾つもの行事、または毎年決まった行事に参加し、自分の興味・関心のある生きものに関する知識をどんどん増やしていきます。そうすると、やがて、自分の知識を人のために役立てよう、と思ったり、行事に参加するより行事に参加する人たちをサポートする立場になれないか、と考えたりするでしょう。そんな『生きものだいすきサポーター(野球で言う施設応援団のような感じ)』を育成することを次の目標にしています。(これが第二段階)

生きものがだいすきになると、いろんなところで観察・調査したくなります。そんな人たちと行事の下見に一緒に出かけ、観察・調査をしたいと思えますし、新規行事

の立案を一緒にしてもらいたいと思っています。ここまで来ると、『サポーター』から『スタッフ（関係者とか裏方というイメージ）』となり、参加者へのアドバイザーというより、遊学館行事企画委員として活躍してもらえます。（これが最終段階）

以上のように、『生きものだいすき人』から『サポーター』を増やし、最終的には『スタッフ』の確保を目指しています。

サポーターが増えれば参加者も増え、色々な交流が始まり、活動の幅も広がります。色々な行事に参加し、『サポーター』や『スタッフ』として係りながらいろんな人と意見交換し、人間形成や社会性を育成してみませんか。

皆さん、一緒に観察・調査し、知識を高め、行事『スタッフ』になりましょう（ボランティアをお願いします）。遊学館職員は親切・丁寧に対応しますからきっと満足していただけます。興味を持った方は是非電話またはメールにて連絡ください。お待ちしております。

遊学館行事のお知らせ

遊学館年間行事の中から、いくつか外で行う自然観察を伴う行事を紹介します。

頂上付近のブナ林と頂上までの登山道に見られる生きものを観察しながら登る、春と秋の葛城登山。

近木川河口付近にできた汽水ワンドを含む、近木川汽水域と河口での色々な生きもの観察会と干潟調査。

秋の鳴く虫の声を聞きながらその声を聞き分ける鳴く虫調べ。

他にも近木川河口の鮎調査。冬の近木川

の源流探検。そして、蕎原での春の七草摘みなど『生きものだいすき』になるような活動を行っています。是非遊学館の年間行事一覧表をご覧になり参加ください。



2012. 1. 6 春の七草摘みの様子

生きものだいすき塾のお知らせ

遊学館では、貝塚の生きものを知り、生きものに興味を持ち、仲良くなってもらおう、という目的で、毎月市の広報に『生きものだいすき』を掲載しています。そこでは貝塚の珍しい生きものを紹介しています。（2年目を過ぎ、3年目に入りました）

その実用版として、『生きものだいすき塾』を開講しています。去年は学校の先生を対象として行いました。生きものの飼育の仕方や、どこに行けば見つけられるのか？自分たちの校区にはどんな鳥が棲み、どんな生きものが見られるのか？など、生きものに関する疑問や、理科の授業で扱う生物教材のことを一緒に勉強しました。

今年是一般の部も開講予定です。ご希望の方は、詳細を遊学館まで電話またはメールにてお問い合わせください。お待ちしております。

毎年恒例（高橋調べ）の桜鑑賞報告

3月、静岡県賀茂郡河津町へ河津桜を見に行きました。昨年は寒さのせいで開花が遅れ、3月初めは三分咲きでしたが、今年は2月末から3月にかけて温かな日が続き、桜が満開を迎えていました。

このサクラは河津町に原木があることから、1974年(昭和49年)にカワヅザクラ(河津桜)と命名され、1975年(昭和50年)には河津町の木に指定されました。カワヅザクラは早咲きオオシマザクラ系とヒカンザクラ系の自然交配種と推定されています。(河津桜祭り実行委員会公式HPより)



2013. 3. 9 静岡県賀茂郡河津町にて

4月。大阪や地元貝塚の桜が咲き終わり、ほぼ散り始める、4月中旬(季節により違いはあります)滋賀県高島市マキノ町海津の桜が満開を迎えます。

日本さくらの会の選定する「日本のさくら名所百選」にも選ばれた海津大崎の桜。樹齢60年を越える600本の華麗な「そめい吉野桜」が琵琶湖岸沿延々4kmにわたり桜のトンネルをつくれます。(滋賀県観光情報HPより)



2013. 4. 12 滋賀県高島市マキノ町海津にて

海津大崎の桜に続き、奥琵琶湖まで足を延ばすと、奥琵琶湖ドライブウェイに沿って数千本の桜が咲いています。桜見物には十分すぎるコースです。ただ、観光客の車で現地に入るまでが大変混雑し、相当時間がかかることを付け足します。

他にも名所と言われる場所はたくさんあります。できれば地元の名所の紹介ができれば嬉しいのですが、そのあたりの情報は既に皆様がお持ちのことと思い、紹介することを遠慮しました。

今年は、この2か所の桜を紹介して館長コーナーを閉じたいと思います。

最後に、今年は遊学館誕生20周年になります。これからも遊学館の行事や運営に皆様のご理解ご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

(高橋 寛幸)

調査速報

和泉葛城山の昆虫調査 2012

和泉葛城山の山頂付近の昆虫相を調べるために、2009年から定期調査を始めました。その前年の2008年は予備的に4回だけ調査に行き、2009年以降は4月から12月まで、月に1回のペースで行くようになりました。しばらく本誌で速報を発表していませんでしたので、ここに2012年の調査結果、および2008年以降の変化をまとめて紹介したいと思います。特に何かのグループを狙って特殊な採集方法を駆使するわけでもなく、休日を利用して散策がてらに調査した結果です。

これまで何度も書いてきたように、山頂付近（大阪府側の北斜面）には国の天然記念物に指定されているブナ林があります。



和泉葛城山のブナ林 (2012. 5. 10)

ブナ林の林床は主にミヤコザサで占められています。その他、クヌギなどの薪炭林やスギ・ヒノキ植林、さらには和歌山県側の南斜面を中心に草原があります。ブナ林では以前はもっと立枯れや倒木が放置されていて、アカアシクワガタなどのポイ

ントがあったのですが、最近倒木が除去されたせいでポイント自体が減少してしまいました。

それでは2012年の調査結果の紹介を始めます。大阪府レッドデータブックの指定種では、ヒトコブササキリモドキ、エゾゼミ、オニクワガタ、スミナガシ、エゾヨツメが確認できました。いずれもランクは準絶滅危惧です。



ヒトコブササキリモドキ (2012. 8. 7)
毎年、秋に成虫が確認できています



スミナガシ (2012. 8. 9)
口吻が赤色だという事に撮影後に気がきました

ヒトコブササキリモドキとエゾゼミは毎年確認され、個体数も少なくないので、安定的な個体群が維持されていると考えられます。オニクワガタも確認されなかった年はあるものの、個体群として安定してい

ると考えられます。スミナガシとエゾヨツメは今回初めて確認されましたが、分布の中心は山頂よりも標高の低い場所にあつて、そこから山頂に移動してきた個体を確認したのかもしれませんが。

2011年までに確認されて今回確認されなかった大阪府レッドリスト種としては、ムカシトンボ、セグロイナゴ、テングオオヨコバイ、セダカテントウダマシ、ヒメヤマユグがあげられます。このうち展望台近くの小さな草むらで確認されたセグロイナゴは和歌山県側の草原由来のものと考えられます。

山地性の注目種としては、エゾハサミムシ、オオトビサシガメ、トゲカメムシ、ツマジロカメムシ、ミヤマカメムシ、トホシカメムシなどが確認されました。



トホシカメムシ (2012. 9. 5)

前号で紹介した成虫越冬するオツネトンボ、毎年春から鳴くハルゼミも確認されています。ホソクビツユムシは貝塚市内では山頂のブナ林内でしか確認されていません。草原性のホソバセセリは良い写真が撮れたのですが、採集せずに帰ってから、当館に1993年の1個体しか標本がないことに気付きました。



ホソクビツユムシ幼虫 (2012. 8. 7)



ホソバセセリ (2012. 8. 7)

気掛かりなのは、2011年まで4年連続で、しかも少なくない個体数が確認されていたヒメクサキリが、今回全く確認されなかったことです。また、最初の2008年だけ確認されて、その後は確認されていない種として、カヤコオロギとテングアワフキがいます。これらも心配です。

その他、オオヒラタカメムシ、コクロツヤヒラタゴミムシ、コクシヒゲハネカクシ、ルリツヤハダコメツキ、エゾサビカミキリ、ジンガサハムシ、ヒメコスカシバ、キタウンモンエダシャクなどが、これまで当館に標本がなく今回初めて確認されたものです。調査を続けると、まだまだ新しい種を確認できると思います。



エゾサビカミキリ (2012. 10. 6)



ジンガサハムシ (2012. 6. 14)

山頂付近では、少しの距離を歩くだけで、山地性の種と草原性の種が観察できます。これまで自然遊学館だよりで紹介してきたように、昆虫だけでなく、植物、キノコ、カタツムリ、鳥なども、なかなか豊富な場所です。春は新緑、夏でも涼しいブナ林、秋は紅葉、冬は雪景色と、四季の変化も彩り豊かです。1年の昆虫調査だけを足早に紹介してしまいましたが、虫好きでない方でも十分に楽しめるし心が洗われる場所だと思います。

(岩崎 拓)

寄贈標本

<鉱物・岩石>

- ◆大高匡子さんより
鉱物標本 233点
- ◆濱谷巖さんより
サンドローズ 1点
サウジアラビア産

<植物>

- ◆食野俊男さんより
ヒマラヤスギの種子 17点
貝塚市千石荘 2013年3月14日採集
アカマツの松笠 2点
(ホンドリスの食べ残し)
和泉葛城山山頂 2013年3月16日採集

<菌類>

- ◆食野俊男さんより
コフキササルノコシカケ 1点
貝塚市千石荘 2013年2月8日採集

<甲殻類>

- ◆岡村親一郎さんより
シャコ (コフジガイ付着) 生体2点
大阪湾泉南沖 2013年1月8日採集
- ◆食野俊男さんより
ヨツハモガニ 生体2点
近木川河口 2013年3月9日採集
(山口忠一さん採集)
- ◆生長正勝さんより
ツノナガコブシ 生体1点
イッカククモガニ 生体1点
二色の浜 2013年3月29日採集
(山口忠一さん採集)

<軟体動物>

- ◆森本静子さんより
カワコザラガイ 1点
貝塚市二色 2013年1月12日採集
- ◆食野俊男さんより
クチベニマイマイ 殻1点
貝塚市千石荘 2013年2月23日採集
- ◆上久保文貴さんより
ドブガイ 殻2点
貝塚市千石荘 2013年3月5日採集
- ◆寺田拓真さんより
サラサバテイ 1点
沖縄県多良間島 2013年3月20日採集

<腕足動物>

- ◆濱谷巖さんより
ハウズキチョウチン 20点
熊本県天草 1980年3月打ち上げ採集

<クモ>

- ◆二色小学校6年生より
キハダエビグモ 成体1点
メガネヤチグモ 成体1点・亜成体1点
貝塚市二色の浜 2013年3月7日採集

<昆虫>

- ◆濱谷巖さんより
アカホシカメムシ 成虫1点
沖縄県備瀬 1993年4月9日採集
- ◆五藤武史さんより
ユーカリハムシ 幼虫1点
堺市浜寺公園 2013年1月12日採集

<寄贈写真>

- ◆食野俊男さんより
オカヨシガモ 2枚
貝塚市近木川河口 2013年1月6日撮影
- ベニマシコ 1枚
貝塚市千石荘 2013年1月7日撮影
- ビンズイ 1枚
貝塚市脇浜 2013年1月24日撮影
- ルリビタキ 1枚
貝塚市水間公園 2013年1月29日撮影
- エナガ 2枚
貝塚市千石荘 2013年1月29日撮影
- ルリビタキ 2枚
貝塚市水間公園 2013年1月30日撮影
- カンムリカイツブリ 1枚
貝塚市近木川河口 2013年2月1日撮影
- オオジュリン 1枚
メジロ 1枚
貝塚市近木川河口 2013年2月25日撮影
- オオマシコ 5枚
ウソ 4枚
カヤクグリ 1枚
和泉葛城山山頂 2013年3月26日撮影
- ◆秋武仁志さんより
ウグイス 1枚
岸和田市久米田池 2013年3月撮影

スタッフ日誌

2月6日、いつも昼間は寝ているアカネズミが朝から大はしゃぎ。運動不足解消のためにいれておいた回し車に、ふだんはまったく興味を示さなかったのですが、この日はクルクルクル目が回るほど、何度も

何度も出たり入ったり。忙しく立ち上がってはヒマワリの種をかじり、上に登って綱をかじり、1日中狭いゲージの中を動き回っていました。

なにがあったのでしょうか？①南太平洋で地震発生、日本にも津波がきた。②工事中の自然遊学館に足場を組みホロをかぶせた。原因を①または②説の職員がいましたが、真相はわかりませんか？？次の日からアカネズミは寝てばかりです。(湯)

3月7日、二色の浜公園管理事務所の方が二色小学校6年生55名と一緒に、松に巻いたコモを外してどんな生きものがいるのかを調べる授業に参加してきました。一番多くいたのはヤチグモの仲間で、ほとんどは幼虫でしたが、少なくともオス成体1匹とメス亜成体1匹を調べた限りでは、メガネヤチグモという、やや人工的な環境を好む種類でした。心配だったセアカゴケグモはいませんでした。冬のコモ巻き目的は、松の葉を加害するマツカレハの幼虫をおびきよせるためなのですが、それは1匹もいず、去年の古いマユ(さなぎ)が1個見つかったただけでした。(岩)

3月9日、海遊館で行われました「第9回 ほっといたらあかんやん！大阪湾フォーラム」に出展参加してきました。去年の夏期特展「海洋・淡水プランクトン」をレイアウトしなおし、大阪湾のプランクトンに焦点をあて、パネル3枚にまとめました。大阪湾を活動の場に行っている多くの団体が展示ブースに並び、ホールでは口頭発表が行われました。盛りだくさんの内容で、

海遊館まで行きながら、水槽の魚たちを覗けなかったのが、ちょい残念...(浩)

3月22日、自然遊学館では2011年5月23日に岩手県陸前高田市立博物館の被災昆虫標本箱5箱を受け入れ、修復・登録作業を行ってきました。その修復作業全体では、全国の25機関が協力し、2月28日には修復標本のデータベースが一般公開され(<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/rikuzentakata/index-j.html>)、3月22日に自然遊学館から受入先の岩手県立博物館に向けて発送されました。当館での修復作業にご協力いただいた大阪市立生き生き地球館の中谷憲一氏に改めて御礼申し上げます。(岩)

お知らせ

特別展「生きもの切り絵」

期間：2013年4月21日(日)
～5月19日(日)
場所：自然遊学館多目的室



生きものを題材にした切り絵作品を展示します。これまでの講座で受講された方の作品も併せて展示していますので、ぜひお越しください（火曜日は休館日です）。

お詫び（第 66 号の訂正）

◆ 自然遊学館だより第 66 号（前号）の表紙でクロジとして紹介した鳥は、正しくはカヤクグリ（スズメ目イワヒバリ科）でした。寄贈写真のコーナーでも間違えていました。申し訳ありませんでした。南港野鳥園で活動されている和田太一さんからご指摘がありました。



カヤクグリ
(2012 年 11 月 20 日、和泉葛城山、
食野俊男さん撮影)

◆ 児嶋格さんに寄稿していただいた「和泉葛城山の陸産貝の観察記録」内のリストで、一部の学名に誤りがありました。著者および読者の皆さまに謹んでお詫び申し上げます。正しいリストを再掲載致します。

和泉葛城山の陸産貝リスト

科 種	学名
ヤマキサゴ科	
モミジヤマキサゴ	<i>Waldemaria japonica reinii</i>
ヤマタニシ科	
ミジンヤマタニシ	<i>Nakadaella micron</i>
アズキガイ科	
アズキガイ	<i>Pupinella (Pupinopsis) rufa</i>
ゴマガイ科	
ゴマガイ	<i>Diplomatina (Sinica) uzensis cassa</i>
キセルガイ科	
ツムガタギセル	<i>Pinguiphaedusa platydera</i>
ウスベニギセル	<i>Tyrannophaedusa aurantiaca</i>
エルベルギセル	<i>Tyrannophaedusa aurantiaca erberi</i>
コスジギセル	<i>Tyrannophaedusa plicilabris</i>
シリオリギセル	<i>Decolliphaedusa bilabrata</i>
ゼイギセル	<i>Ventriphaedusa proba</i>
カギヒダギセル	<i>Mundiphaedusa heteroptyx</i>
ホソヒメギセル	<i>Aulacophaedusa gracilispira</i>
オオギセル	<i>Megalophaedusa martensi</i>
コンボウギセル	<i>Mesophaedusa hickonis</i>
カスゴギセル	<i>Pictophaedusa hungerfordiana</i>
ベッコウマイマイ科	
カサキビ	<i>Trochochlamys crenulata</i>
オオウエキビ	<i>Trochochlamys fraterna</i>
ハリマキビ	<i>Parakaliella harimensis</i>
トガリキビ	<i>Parakaliella acutanguloides</i>
キビガイ	<i>Gastrodontella stenogyra</i>
ウスイロシタラ	<i>Parasitella pallida</i>
オオクラヒメベッコウ	<i>Yamatochlamys lampra</i>
ヒラベッコウ	<i>Bekkochlamys micrograpta</i>
キヌツヤベッコウ	<i>Nipponochlamys semisericata</i>
ナンバンマイマイ科	
コベソマイマイ	<i>Satsuma myomphala</i>
オナジマイマイ科	
フチマルオオベソマイマイ	<i>Aegista tumida</i>
アワジオトメマイマイ	<i>Trishoplita awajiensis</i>
ギュリキマイマイ	<i>Euhadra eoa gulicki</i>

* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2013 春号 (No. 67)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色 3 丁目 26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/

発行日 2013. 4. 30

この小冊子は市内印刷で作成しています。